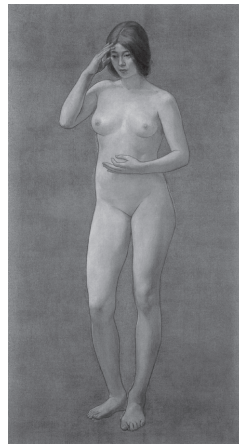
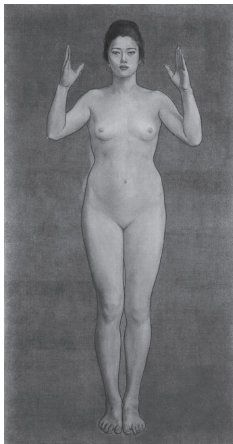
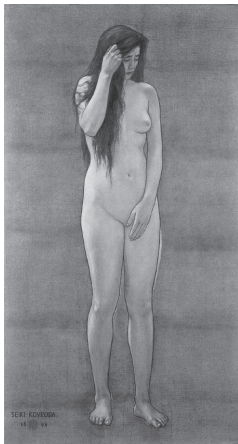


## ○黒田清輝氏の裸美人談

社員は昨日某所に於て黒田清輝氏と邂逅す問ふに裸體畫禁止説の一件を以てす氏曰く若し警保局に於て一般の裸體畫を禁ぜんとするゝと實ならば日本官吏の餘りに無能なるを惜まざるべからず畫の猥褻に涉ると否とは必ずしも衣服を纏ふと絡はざるとに關せず衣服を纏へるものといへども畫様の如何に依りて猥褻となるべく而して其猥不猥は衣の長短大小に由らざるゝと明かなり元來、俗人の目に視て猥褻か不猥褻か見界の附き易きは文章よりも畫を以て特に然りとす警保局に於て小説を視て風俗を壞亂するや否やを判別するは敢て難きを感じざる所なるべく小説且つ然りとせば畫の猥不猥を鑒別するゝと蓋し易々たらん聞く裸體畫の中にて眞に美術の模型となるべきものと他の猥褻に流るゝものとを鑒別するは難事なるがゆゑ寧ろ一般に裸體畫を禁ずべしとの説、其筋に起れりと然るに畫が猥褻の意に出るや美術の巧匠に成れりやは常識あるもの一見して之を知るに難からず若し見界の附き難きを理由として一般に裸體畫を禁ずるが如き妄挙に出づるゝとあらば是れ日本政府が無能無識を世界に表白するものなりと云々、氏は白馬會に出品したる智、感、情の三美人に就きて曰く智、感、情の文字は少しく當字に似たるが當初、畫家の三派なる理想、引證、寫實の意を表さんとして筆を執りたるものに外ならず這是深き意味あるにあらずして理想を智、引證を感、寫實を情に改めたるまでの事なりと

「裸体画禁止説」、すなわち裸体画論争についての黒田の弁だが、明治三〇年一〇月二七日から二月五日まで開催された白馬会第二回展に黒田が出品した《智・感・情》に言及している点が注目される。

《智・感・情》の主題に関しては他に、『毎日新聞』明治三〇年一月一八日付に黒田と親交のあつた美術記者吉岡芳陵が「黒田清輝氏の裸体画は題して智、情、感と云ふ、惟ふに絵画に印象派理想派写真派の三者あること端なくも氏の想を駆りて、印象即ち『感』なるものを理想即ち『智』なるものを写真即ち『情』なるものを何物にも妨げられざる裸体に籍りて円満に表示せんと企てしめたるならんか」と記している。また『読売新聞』明治三〇年一月二九日付にも、「中なるハ感と云ひ、Impressioの意、右なるハ智と云ひ、Ideal、左なるハ情と云ひ、Realの意なりとか」との記述がみられる。



黒田清輝《智・感・情》東京国立博物館蔵